



金太郎と桃太郎のアクセント構造

窪園, 晴夫

(Citation)

神戸言語学論叢, 1:35-49

(Issue Date)

1998-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001540>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001540>



金太郎と桃太郎のアクセント構造*

窪菌晴夫

神戸大学

Summary

This paper analyzes the accent patterns of X-taroo and X-ziroo compounds and discusses some related issues of interest. The personal names, *taroo* and *ziroo*, are known to exhibit peculiar compound accent patterns when they form a larger personal name such as *Kintaroo*, *Momotaroo* and *Kinziroo*. This paper demonstrates that, unlike ordinary noun-noun compounds, the accentuation of X-ziroo and X-taroo compounds is determined by the phonological length of their lefthand member, with reference to syllable structure as well as mora structure. This reinforces the argument that the syllable is indispensable in the putatively mora-based prosodic system of Tokyo Japanese. The second half of the paper discusses the implications of this descriptive generalization to argue (a) that the accentual difference between X-ziroo and X-taroo compounds is attributable to the presence or absence of voice in the righthand member, and (b) that the three accent patterns exhibited by X-taroo and X-ziroo compounds are governed by the general principle of trichotomy, which underlies various linguistic phenomena in natural languages.

キーワード：金太郎、桃太郎、複合語アクセント、音節構造、連濁

1. 問題

「太郎」、「次郎」という語を後部要素（以下「後部」と略す）に持つ複合語構造の人名は奇妙なアクセント型を示す。これらの後部は、伝統的な言い方をすると(1a)のように「3モーラ頭高」の構造を有しており¹、その意味では(1b)にあげた名詞と同じ音韻構造を有している。ところが複合名詞の後部の位置に現れる場合には、両者の間に顕著な違いが生じる。

- (1) a. た¹ろう（太郎）、じ¹ろう（次郎）
b. カ¹メラ、バ¹レー、さ¹ぎょう（作業）

東京方言の複合名詞アクセント規則は、後部の長さによっていくつかのグループに細区分され、いずれの場合にも後部によって画一的なアクセント型が作り出される。たとえば後部が(1b)の名詞のように3モーラ頭高という構造を有する複合語は、(2)のように自らの初頭音節に複合語アクセントを持つ——別の見方をすると自らのアクセント核を複合語アクセントとして保存する（秋永 1981; 佐藤 1989; Kubozono 1995b; 上野 1997）。後部の長さに関係なく、複合名詞アクセント規則は(3)の原則に従っている²。

- (2) a. カ¹メラ： インスタントカ¹メラ、胃カ¹メラ
b. バ¹レー： ビーチバ¹レー、ママさんバ¹レー
c. さ¹ぎょう（作業）： 農さ¹ぎょう、畑さ¹ぎょう

(3) a 後部のモーラ長によって異なるアクセント型を示す。

b 後部が同一であれば、同じアクセント型となる。

これに対し「太郎」が後部となる複合語は、(4)に示す三つのアクセント型を示す³。(4a)は無核(平板)であり⁴、(4b)と(4c)はそれぞれ前部要素(以下「前部」)の末尾と後部の初頭音節に複合語アクセントを有する型である。このうち(4c)が(2)と同じ型である。

(4) a. 金^{きん}太郎、鬼^き太郎、乱^ね太郎、寝^{きょう}太郎、Q太郎

b. 桃^{もも}太郎、金^{かね}太郎、鬼^{おに}太郎

c. 力^{ちから}太郎、ウルトラマン太^{ちから}郎

(4)に示したような一見奇妙な現象は、決して複合名詞アクセント規則に対する単なる例外として片付けられるものではない。アクセント規則(あるいは音韻規則)への例外は、その大半が語彙的な例外である。たとえば後部が1モーラないしは2モーラの長さを持つ複合語では、(5a,b)に示したように前部の末尾音節に複合語アクセントを持つ場合が一般的であるのに対し、後部に核が来る(5c)のような複合語は例外とみなされる。規則的な振る舞いを示す多数の事例を前提として「例外」が存在しているのである。

(5) a. あいち^{あいち}けん(愛知県)、ひょうご^{ひょうご}けん(兵庫県)

b. あめりか^{あめりか}じん(アメリカ人)、いんど^{いんど}じん(インド人)

c. にほん^{にほん}じん(日本人)、ちょうせん^{ちょうせん}じん(朝鮮人)

これに対してX太郎、X次郎という複合語の場合には、(2)と同じ(4c)のアクセント型を規則的、(4a,b)を例外的とみなすわけにはいかない。(4)に示した三つのアクセント型がそれぞれに生産性を持っているからである。つまり、これらの複合語は(2)に例示した従来の複合語アクセント規則では十分に説明できない複雑な様態を示す一方で、その複雑な様態が特定の規則によって作り出されているようなのである。

本稿ではX太郎・X次郎という複合語のアクセント構造を分析し、(4)の奇妙な現象の背後にある規則性を捉えるためには、「複合語のアクセント構造がモーラを単位とする後部の長さによって決まる」という(3)の前提から離れることが鍵となることを示す(2節、3節)。本稿ではさらに、X太郎とX次郎の間に見られるアクセント構造上の相違点が後部の清濁と関連づけられるという知見(4節)や、(4)に見られるアクセント構造の三分法が、実は自然言語に広範囲に見られる「1、2、3以上」という原理と一致するものであることを指摘する(5節)⁵。

2. X次郎のアクセント構造

X太郎のアクセント型を分析する前に、それとよく似た特徴を示すX次郎のアクセント型を分析してみよう。X次郎は前部(=X)のモーラ数によって(6)の三つのアクセント型を示す。

(6) a. 小次郎、与次郎、弥次郎

b. 金^{きん}次郎、新^{しん}次郎、宗^{そう}次郎、高^{こう}次郎、正^{しょう}次郎

b' 桃^{もも}次郎、豆^{まめ}次郎、金^{かね}次郎、正^{まさ}次郎、高^{たか}次郎、力^{りき}太郎

c. 力次^{ちから}郎、ウルトラマン次^{あたま}郎、頭次^{あたま}郎

秋永 (1981:26)が指摘しているように、前部が1モーラであれば(6a)のように複合語全体が無核化(平板化)し、前部が2モーラであれば(6b)のように前部の末尾に複合語のアクセント核が生じる。伝統的な分析では、(6b)と(6b')の違いは前部の2モーラ目が特殊拍であるか自立拍であるかという違いであり、(6b)は特殊拍に付与されたアクセント核が直前の自立拍に移動したものと解釈されてきた。特殊拍はアクセント核を担わないと仮定して、(6b)と(6b')を一般化しようとしているのである。これに対し「アクセント核の付与単位がモーラではなく音節である」という一般言語学的な考え方(McCawley 1968, 1978; 窪田 1998)に立つと、(6b,b')は「前部の末尾音節に複合語アクセントが生じる」という形に一般化できる。本稿では以下この一般化に基づき、「金^{きん}次郎」のように音節末尾に核を置く簡略表記を採用する。

最後に前部が3モーラ以上の場合には、(6c)に示したように後部の初頭音節に複合語アクセントが生じる。この三番目の型が、(2)にあげた一般の複合名詞と共通するアクセント型である。以上の分析をまとめると(7)のようになる。(7)の一般化は、X次郎のアクセント型が基本的に前部Xのモーラ数によって決定されることを示している。

(7) X次郎のアクセント構造

- a. Xが1モーラであれば無核となる(=6a)
- b. Xが2モーラであればXの末尾音節に核が生じる(=6b,b')
- c. Xが3モーラ以上であれば後部の初頭音節に核が生じる(=6c)

3. X太郎のアクセント構造

X太郎もX次郎によく似たアクセント構造を示す。秋永 (1981)が指摘しているように、前部が1モーラ(それゆえ1音節)の場合には、(6a)の「小次郎」と同じように複合語全体が無核(8a)となり、また前部が1音節2モーラの場合(8b)でも、同じ無核の複合語が生成される。後者は(6b)とは異なるアクセント型であり、これがX太郎とX次郎を区別する決定的な違いとなる。もっとも、前部が二重母音性の母音連続からなる場合(たとえば貝太郎)には無核化しにくく、次に述べる(8c)と同じアクセント型となる⁶。

(8) a. 鬼太郎、寝太郎；与太郎、弥太郎、小太郎、曾太郎；背太郎、目太郎、毛太郎

b. 撥音：金太郎、乱太郎、卵太郎^{らん}、新太郎

長音：Q太郎、宗太郎、長太郎、昭太郎(小太郎)

二重母音：貝太郎(かい^{かい}たろう、?かいたろう)

c. 桃^{もも}太郎、垢^{あか}太郎；正^{まさ}太郎、金^{かね}太郎、鬼^{おに}太郎、宗^{むね}太郎、力^{りき}太郎d. 力太^{ちから}郎、ウルトラマン太^{あたま}郎、頭太^{あたま}郎

次に、前部が2音節2モーラの場合には、(8c)のように前部の末尾に複合語アクセントが置かれる⁷。(8b)と(8c)の違いは「金太郎」—「金^{かね}太郎」、「宗太郎」—「宗^{むね}太郎」などのペアを比較するとよくわかる。いずれのペアでも前部が1音節2モーラの場合が無核化し、2音節2モーラの場合が有核となる。最後に、前部が3モーラ以上の長さを持つ場合には、(8d)のように後部

初頭に複合語アクセントが生じる。これは(6c)と同じアクセント型である。(6c)が「3音節以上」ではなく「3モーラ以上」であることは、(9)のような例の分析から判明する。(9)では前部が2音節3モーラの名詞であるが、複合語全体のアクセント型は(8d)と同一である。

- (9) a. カレー太^ˈ郎、次郎太^ˈ郎、ボタン太^ˈ郎
 b. スープ太^ˈ郎、パーマ太^ˈ郎、女太^{おんな}郎、パンク太^ˈ郎

以上の分析から、X太郎のアクセント構造は次のように一般化することができる。

(10) X太郎のアクセント構造

- a. Xが1音節であれば無核となる(=8a,b)
 b. Xが2音節2モーラであればXの末音節に核が置かれる(=8c)
 c. Xが3モーラ以上であれば後部の初頭音節に核が置かれる(=8d)

(7)にまとめたX次郎のアクセント規則と(10)で述べたX太郎のアクセント規則は、後部ではなく前部の音韻構造（ここでは長さ）に依存するという共通した特徴を持っている。またX次郎とX太郎の間にも微妙な違いがあり、前者のアクセント構造が基本的に前部のモーラ長によって決定されるのに対し、後者の場合には、前部のモーラ長だけでなく音節長の情報も必要となってくる。X太郎の場合には1音節2モーラ(8b)と2音節2モーラ(8c)が基本的に異なる振る舞いを示し、前者は1音節1モーラ(8a)と同じアクセント型を示すのである。X太郎とX次郎の異同をまとめると次表のようになる（網掛け部分は相違点を表す）。

〔表〕X太郎とX次郎の異同

後部 前部	太郎	次郎
1音節1モーラ	無核 (鬼太郎)	無核 (小次郎)
1音節2モーラ	無核 (金太郎)	前部末尾 (金 ^ˈ 次郎)
2音節2モーラ	前部末尾 (桃 ^ˈ 太郎)	前部末尾 (桃 ^ˈ 次郎)
3モーラ以上	後部初頭 (力太 ^ˈ 郎)	後部初頭 (力次 ^ˈ 郎)

このようにX太郎のアクセント規則に前部の音節構造が関与してくることは、アクセント規則と音韻的長さの関係を考える上で非常に興味深いことである。(3a)で指摘したように、通常の複合名詞のアクセント構造を決定する規則は後部のモーラ長によって特徴づけられている。ところがX太郎の場合には、後部ではなく前部の長さがそのアクセント型を決定し、さらに、その音韻的長さの決定に、モーラだけでなく音節という単位が関与しているのである。

ここで、アクセント現象の一般化に音節という概念が必要であるという知見が決して新しいものではないことを強調しておきたい。前節で述べたように、アクセント核を担う単位はモーラで

はなく音節であると考えることによって、一見異なるように思える二つのアクセント型を統一的に説明できるようになる。X次郎の場合には、(6b,b')に示したアクセント型を(7b)のように一般化できるのである。

しかしながら従来考えられてきた音節の役割は「アクセント核を担う」単位としての役割だけであった。つまり(6b,b')のようなアクセント規則の「出力」を一般化するために提案されたものであった。音節という音韻単位がアクセント規則のその他の側面にどのように関わっているかという問題については、これまで十分な研究が行われてきたとは言えない(cf. Kubozono, forthcoming)。その意味において、(10)にまとめたX太郎のアクセント規則は、アクセント規則において音節が果たす別の役割を示すものと言える。

アクセント現象と音節との関わりはこれだけではない。近年の研究により、アクセント現象の一般化にモーラとならんで音節が大きな役割を果たすことが明らかにされつつある。たとえば、普通の複合名詞のアクセント規則において、後部が同じ2モーラの長さを持つ場合でもそれが1音節か2音節かによって顕著な違いが生じることが知られている(窪田・太田 1998)。(11)のように後部が2モーラで有核(頭高)であっても、その音節構造によって異なるアクセント型が生じる。具体的には、(11a)のように後部が2音節語であれば、この要素が本来持っているアクセント核が保持されることが多く、一方(11b)のように後部が1音節であれば、この要素本来の核は保持されにくく、(5a,b)と同じように前部の末尾に複合語アクセントが置かれるようになる。

(11) 複合名詞アクセント規則と音節構造

a. パス：通勤パス

ピザ：ミックスピザ

あめ：にわかあめ(にわか雨)

b. パイ：ミートパイ

ピン：ネクタイピン

かい：さくらかい(桜貝)

(11)の現象は、アクセント現象の一般化に音節という単位が不可欠なものであることを示している⁸。このような現象を(10)に示したX太郎のアクセント型と関連づけて考えるならば、(10)に現れたアクセント規則と音節との関わりは、音節が果たす一般的な役割の一つを表したものと解釈することができる。

4. 太郎と次郎の比較

4. 1 太郎と次郎の異同

既に述べたように、X太郎とX次郎のアクセント構造の違いは、前部が1音節2モーラという構造を持つ場合に、どのようなアクセント型が生じるかという点である。このタイプの前部要素は、X次郎では2モーラ語として振る舞い、X太郎では1音節語として振る舞う。この違いを全体の中で捉えると(12)のように表すことができる。

(12) X太郎とX次郎の異同

a. モーラの次郎

X次郎のアクセント構造はXのモーラ数で決まる

b. モーラと音節の太郎

X太郎のアクセント構造はXのモーラ数と音節数で決まる

ではX太郎とX次郎の間になぜこのような違いが生じるのであろうか。この問題を解く手がかりは、太郎や次郎と同じ構造（つまり2音節3モーラで頭高のアクセント型）でを持ち、かつ、他の要素と結びついて複合名詞を作り出す人名を調べることである。具体的には、X四郎、X九郎、X五郎の三つが考えられる。この三つの複合名詞のアクセント構造を調べてみると、X四郎とX九郎はX太郎と同じ(10)の規則性を、X五郎は概略(7)に示したX次郎の場合と同じ規則性を示すことがわかる（cf. 秋永 1981）。まずX四郎とX九郎の場合を見てみよう。

(13) X四郎のアクセント構造

a. 前部 = 1 音節 1 モーラ

^こ小四郎、^き鬼四郎

b. 前部 = 1 音節 2 モーラ

^{きん}金四郎、^{ぎん}銀四郎、^{ちやう}長四郎

c. 前部 = 2 音節 2 モーラ

^{もも}桃^ね四郎、^{まめ}豆^ね四郎、^{かね}金^ね四郎、^{りき}力^ね四郎

d. 前部 ≥ 3 モーラ

^{ちから}力^ね四郎、ウルトラマン^ね四郎

(14) X九郎のアクセント構造

a. 前部 = 1 音節 1 モーラ

^こ小九郎、^き鬼九郎

b. 前部 = 1 音節 2 モーラ

^{きん}勘九郎、^{きん}金九郎、^{ぎん}銀九郎、^{ちやう}長九郎

c. 前部 = 2 音節 2 モーラ

^{もも}桃^ね九郎、^{まめ}豆^ね九郎、^{かね}金^ね九郎、^{りき}力^ね九郎

d. 前部 ≥ 3 モーラ

^{ちから}力^ね九郎、ウルトラマン^ね九郎

既存の複合語の数はX太郎ほど多くはないが、新造語まで含めて考察してみると、(13)のX四郎と(14)のX九郎はともに(8)に示したX太郎と同じ規則性を示すことがわかる。X太郎とX次郎の違いを作り出す1音節2モーラの場合（(13b), (14b)）を見てみると、(8b)と同じように無核の複合語となり、他の長さの場合にもX太郎と同じアクセント型が観察されるのである。

これに対し、X五郎は少し異なるアクセント型を示す。前部が1モーラの場合(15a)と3モーラ以上の場合(15d)はX太郎、X次郎と同じであることから、基本的にはこの両者と同じ複合語アクセント構造を示すものと言える。しかしながら、X太郎とX次郎の違いが現れる後部が1音節2モーラの場合(15b)には、状況がやや複雑である。

(15) X五郎のアクセント構造

a. 前部 = 1 音節 1 モーラ

小五郎、弥五郎、次五郎

b. 前部 = 1 音節 2 モーラ

長音：長^こ五郎、九^{きゅう}五郎、小^{しょう}五郎

撥音：金五郎、銀五郎、新五郎、万五郎

c. 前部 = 2 音節 2 モーラ

むつ^つ五郎、桃^{もも}五郎、豆^{まめ}五郎、金^{かね}五郎、力^{りき}五郎

d. 前部 ≥ 3 モーラ

力^{ちから}五郎、ウルトラマン五郎

前部が(15b)の構造を有している場合には、「金太郎」に現れる無核の型と、「金^こ次郎」に現れる有核の型が併存している。ほとんどの語について、この二つのアクセント構造が許容されるようであるが、一般的傾向としては、前部が長音で終わる場合（例：長五郎、九五郎）には無核より有核の方が優勢であり、逆に前部が撥音で終わる場合（例：金五郎、銀五郎）には無核の方がやや許容度が高いようである。後者の場合には語によって優勢のアクセント型の変動が大きく、「金五郎」では圧倒的に無核の発音が優勢であるが⁹、「新五郎」「万五郎」になると逆に有核の発音が許容度が高くなるようである。(15b)全体として見ると、有核が無核より許容度が高いという傾向が観察される。また、「鎌倉権五郎（げんごろう）」や、「前田金五郎（きんごろう）」などの実在する語では前部が撥音で終わっていても有核の発音が一般的であるとみられるところから¹⁰、(15b)では、前部の末尾音節に核を有するアクセント型が無標のものであると推測される¹¹。

(15b)のアクセント構造が基本的に有核であるという推論して議論をさらに一歩進めると、(15)の事実は、X五郎が(7)にまとめたX次郎のアクセント構造と基本的に同じ規則性を示すことを意味している。つまり、X四郎とX九郎はX太郎と同じ規則性を示し、X五郎はX次郎と同じ規則性を示すのである¹²。では、この二つのグループを分けている基準は何であろうか。

これらの複合語の後部は子音の調音点や母音の種類などさまざまな違いを見せるが、X太郎グループは後部が清音で始まり、X次郎グループは後部が濁音で始まるという特徴が見られる。つまりX太郎グループとX次郎グループの間には、後部の清濁という違いがあるのである¹³。このことをまとめると(16)のようになる。

(16) X太郎とX次郎のアクセント構造の違い

後部が清音で始まる場合にはX太郎タイプのアクセント規則(10)に従い、後部が濁音で始まる場合には、X次郎タイプのアクセント規則(7)に従う。

4. 2 アクセント構造と清濁との関連

X太郎とX次郎の間に見られる(12)の違いをこのように一般化すると、次に、後部の清濁と複合語全体のアクセント型の間になぜ(16)のような対応関係が見られるかという新たな疑問が生じる。つまり、なぜ後部が濁音で始まる場合（X次郎、X五郎）には、複合語のアクセント構造がモーラだけで一般化でき、一方、後部が清音で始まる場合（X太郎・X四郎・X九郎）には、モーラだけでなく音節も必要となってくるのかという問題である。

これまで語のアクセント構造と子音の清濁との関係については少なからぬ研究がある（たとえば佐藤 1989参照）。たとえば連濁との関連では、複合語の後部が連濁を起こす場合には、複合語全体が平板化する傾向が観察される（杉藤 1965）。人名を題材に(17)にいくつか具体例をあげる。

(17) a. しまだ（島田） vs. し¹ばた（柴田）

いまだ（今田） vs. い¹ばた（茨田）

b. なかじま, *なか¹じま vs. なか¹しま～なかしま（中島）

(17a)では、「田」が連濁を起こす例が無核化し、一方連濁を起こさない例は有核（頭高）となっている。(17b)にあげた「中島」の例でも、連濁を起こす場合には無核化するのに対し、連濁を起こさない発音では核が生じる傾向がある。後者に対しては無核の発音も許容されるが、前者に対しては有核の発音（なか¹じま）は許容されない——あるいはきわめて許容度が低い。この違いは(17a)に見られる違いと同質のものと言える。

(17)の例に現れた連濁とアクセント構造との関係は、「濁音は有核化を阻止する」という傾向を示唆している。これはアクセントの生理構造を考えるとときわめて自然な相関関係である。まず(17)で問題にされている清音・濁音の違いは音声的な無声・有声の区別と一致するものであるから¹⁴、ここで問題となっている傾向は「有声音は有核化を阻止する」という表現に読み代えることができる。有声音は声帯の振動を伴う音であることから、後部の初頭音が連濁によって有声化するということは、連濁（有声化）しない場合に比べ大きな声帯の活動を伴うことを意味する。一方、ここで問題となっている有核化とは前部においてピッチを下降することを意味する。ピッチの下降は声帯の振動を低下させることによって作り出されるものであるから、有核化とは声帯の活動を低下させることになる。声帯は連濁に伴い活動が大となり、有核化によって活動が低下するのである。それゆえ、複合語の後部が連濁する場合に、その直前にアクセント核を置いて声帯の活動を低下させること（たとえば「なか¹じま」と発音すること）は、一方では声帯の活動を抑えようとしながら他方ではその活動を大きくしようとすることに他ならない。つまり、声帯に相反する力を要求することになるのである。このように考えると、「連濁→平板化」という連動は、声帯の活動に対する要求という点からきわめて自然な相関と言うことになる¹⁵。これに対して、(17)にあげた「柴田、茨田、中島」のように後部が連濁を起こさない複合語では、連濁が要求する声帯活動上昇の力が働かないために、ピッチの下降が起こりうる（核が生じうる）という解釈が成り立つ。

以上述べたように、清濁とアクセント型との関係には生理的な条件から一定の相関関係が見られるわけであるが、残念ながら(16)にまとめたX太郎・X次郎の相違点を同じように説明することはできない。X太郎・X次郎の場合には、後部が清音で始まる場合に無核（たとえば「金太郎」）となり、濁音で始まる場合に有核（たとえば「金¹次郎」）となるのである。(17)では「濁音→無核、清音→有核」という相関関係が現れているわけであるから、(16)の相関関係は(17)の場合とは全く逆のものであることがわかる。つまり、「金次郎」の場合には、後部の濁音が生理的に無核を要求するにも関わらず有核化し、後部が清音で始まる「金太郎」は有核化してもかまわないにもかかわらず、逆に無核となっているのである。

(16)と(17)の間に見られる清濁とアクセント構造（有核・無核）との相関関係のずれは、一つのパラドックスとも思える。生理的な観点だけから見ると、(17)が清濁とアクセント核出現の自然

な相関関係を表しているのに対し、(16)はまったく奇妙な相関関係と言わざるをえない。このパラドックスに対して、今のところは答えが見あたらない。ただ、解決の手がかりとなる一つの可能性として、(17)の濁音と(16)の濁音の起源・出所の違いを指摘することができる。(17)の語に見られる濁音は連濁という音韻過程によって作り出されたものである。これに対し、(16)に現れてくるX次郎の濁音は、「次郎」という後部が初めからもっていたものであり、連濁によって生じたものではない。換言すれば、(17)の濁音は規則によって派生されたもの、(16)の濁音は基底において既に指定されているものという違いが存在するのである。この出自の違いが、なぜ(16)と(17)の間の違いを作り出すのかは今後検討しなくてはならないが、もし両者の違いが恣意的なものではないと仮定するならば、この出自の違いと(16)と(17)の間に見られる濁音とアクセント構造の相関関係の違いを（不完全指定などの理論的道具立てを援用して）理論的な枠組みの中で説明することが必要となってくる。今後の研究課題である。

5. 数字の謎

これまで繰り返し述べてきたように、X太郎とX次郎はXが1音節2モーラの場合に微妙な違いを示すが、大局的に見ると、(10)のX太郎の場合でも、(7)のX次郎の場合でも、「1, 2, 3以上」という分割法で三つの異なる複合語アクセント型を示す。一般の複合名詞アクセント規則と比較してみると、X太郎・X次郎はXが3（モーラ）以上の場合に他の複合名詞（たとえば(2)）と同じ規則性を示すようになり、「 $X=1$ 、 $X=2$ 」の二つの場合には、これとは異なる個別的な規則性を示すという知見が得られる。本稿では最後に、この「1, 2, 3以上」という三分法が何を意味しているのか、あるいは、このような分け方が自然言語においてどの程度の一般性を持つものか考察してみる。

自然言語の諸相を見てみると、1から始まる自然数の連続をこの三段階に分ける現象は決して珍しいことではない。たとえば自然言語では名詞の数(number)を区分する際に単数・双数（＝両数 dual）・複数の三段階に区切る言語が少なくない。現代英語は単数($N \leq 1$)と複数($N > 1$)の二段階に区分しているが¹⁶、その祖語である印欧語は単数($N \leq 1$)、双数($1 < N \leq 2$)、複数($N > 2$)という三段階の体系を有していた（松浪他編 1983:50）。二分法であれば1と2の間で境界を引き、三分法であれば1と2の間と2と3の間でそれぞれ境界を設けるとするのが無標の数え方のようである。逆の見方をすると、1と2の間で切らずに2と3の間で切ったり、あるいは「1・2・3・4以上」というような四分法は一般性に欠ける区分法であるように思われる。

次に子供の言語習得過程を見てみると、単語一つを発声するいわゆる一語文の段階に始まって、「おなか、すいた」、「ママ、好き」のような二語文の段階に進む。この後に「ノンちゃん、おなか、すいた」のような三語文の段階が存在するが、安定した三語文の段階というものはない。三語文を話せるようになるとすぐに四語文、五語文も話せるようになるのである（Pinker 1994, 伊藤友彦氏私信）。このことは、語彙獲得の過程も「一語文、二語文、多語文（つまり3語以上）」という三段階から成ることを意味している。

同様の三分法が数字の獲得にも見られる。幼児が数字（基数詞）を覚える際の最初の段階は1から10までの数字を覚える段階である。何カ月かの訓練の後にこの段階を克服すると、次に11～

20（あるいは10~20）を覚える段階がくる。さらに数カ月の訓練によってこの段階を克服すると、21~30（あるいは20~30）を覚える段階に入るが、この段階は31~40、41~50を覚える段階から独立してはいない。21~30を言えるようになるのとほぼ同時に31~40、41~50などもほとんど間違いなく言えるようになる。99までの獲得過程に限定すると、この過程は1~10、11~20、21~99の三段階に分かれるのである。

この数字習得に見られる三分法は、実は数字の体系そのものと密接に関連している。1から10までは意味（数字）と音が恣意的な関係にあり、子供はこの恣意的な記号の発音を一つ一つ覚え、その正しい配列順も覚えることから学習を始める。これに対し、11以上の数字の構造には規則性があり、日本語では11~19は「 $10 + \alpha$ 」、20以上は「 $\beta \times 10 + \alpha$ 」という構造を有している。 α と β の部分には、最初の段階で覚えた1~9の数字をその順序で挿入すればよい。ここで、11~19の「 $10 + \alpha$ 」という構造は、20以上の「 $\beta \times 10 + \alpha$ 」という構造とよく似ているが同一ではないことを強調しておく必要がある。後者の論理でいくと前者は「 $1 \times 10 + \alpha$ 」という数字列になってしまい、たとえば11は「いちじゅういち」、15は「いちじゅうご」となる。理屈からいくと15と35は同じ構造を持ちそうであるが、実際の日本語の数字体系では、10の台を無標扱いし、11~19を単に「 $10 + \alpha$ 」という等式で表しているのである。21~99の第三段階に入った子供が、最初の一時期、それまで正しく獲得したはずの11~19を「いちじゅう α 」と——たとえば11を「いちじゅういち」、14を「いちじゅうよん」と——読み間違ってしまうのは、この無標-有標の違いに気がつかずに、一度すべてに有標の構造をあてはめてしまうためと考えられる。この一時的な過剰訂正時期を克服して、子供ははじめて1~99までの数字列を正しく発音できるようになる。この段階に到達するまでに、1~10、11~20、21~99という三つの段階が存在しているのである。ここでもまた、21~30と31~40の間には明確な境界はなく、存在しているのは1・2・3以上という三つのステップである。

同類の三分法は部分的ながら伝統的な数字体系にも観察される¹⁷。10、20、30...という数字列の読みを見てみると、10（とう）と20（はたち）が1（ひとつ）、2（ふたつ）とは形態的に関連性のない音形を持っているのに対し、30以上は(18)に示すように3、4、5...から派生した音形を有している。ここにも「1と2が例外、3以上が規則的」という構造が現れている。

- (18) 3（みつ）—30（みそ）、4（よつ）—40（よそ）、
 5（いつ）—50（いそ）、6（むつ）—60（むそ）、
 7（ななつ）—70（ななそ）、8（やつ）—80（やそ）

ところで、このような規則性を持つのは日本語の数字体系であって、英語やその他の言語では異なる体系・区分法が存在しているのではないかという疑問が生じるかもしれない。ここで英語の1~99の数字体系を見てみると、日本語とは二つの点で異なっている。一つは上述の第二段階である11~19が日本語のような「 $10 + \alpha$ 」の構造ではなく、「 $\alpha + 10$ 」という逆の語順を有していることである——たとえば14は*fourteen* (4+10)という構造を持つ。英語と日本語のもう一つの違いは、同じ第二段階の数字に*eleven*, *twelve*という語彙化された形が出てくるということである。日本語の11、12が13以上と同じように、一貫して「 $10 + \alpha$ 」という構造に従っているのに対し、英語の11、12はそのような規則性を持たない個別語彙の語形をとっている。これは一見すると奇妙な現象のように思えるが実はそうではない。*eleven*, *twelve*という例外的な数字列の後に*thirteen*

(=*three+ten*), *fourteen* (= *four+ten*)...という規則的な数字列が続く構造は、「11, 12, 13以上」という三分法構造をとっている。これは、これまで述べてきた「1・2・3以上」という三分法と基本的に同じ構造である。このように、英語の特異的な構造と見えた部分が、実は1~10、11~20、21~99という基本的な三分法構造と同じ原理に従っているという知見が得られる。

「1・2・3以上」という三分法の原理は英語の序数詞や反復数詞の体系にも見られる。順番を表す序数詞 (*first, second, third, fourth...*) では、1 (= 1 番目) と 2 (= 2 番目) を表す序数詞だけが基数詞とは独立した語構造を持っている。3 (= 3 番目) 以上の序数詞はすべて基数詞から派生によって作り出されたものである¹⁸。また *once, twice, three times, four times* という反復数詞表現でも、1 と 2 を個別語彙で表し、3 以上は「基数詞+times」という規則的な構造で表している^{19,20}。かつては *three times* に対して *thrice* という反復数詞が存在していたが、現代英語では規則的な構造に水平化されてしまっている。また *once, twice* に対して *one time, two times* という表現も存在するが、これは歴史的にも新しい表現であり、また強調の意味を付加されるところから (荒木・安井編 1992: 768)、*once, twice* ほど一般的なものとは言えない。このようなバリエーションを加味しても、「1・2・3以上」という原則は否定できないのである。

以上、X太郎とX次郎のアクセント規則の基底にある「1、2、3以上」という三分法が日本語でも英語でも比較的一般性の高い原理であることを論じた。もっともこの議論は、他の分割法の一般性を否定するものではない。日本語の音韻現象に限定しても、一般的な複合名詞アクセント規則のように、1 モーラと 2 モーラを一つにまとめ、2 モーラと 3 モーラの間に境界を引くような現象も存在する²¹。X太郎・X次郎に見られる「1、2、3以上」という三分法が、他の分割法に比べてどのくらい一般性の高い原理であるか、今後慎重に検討してみる必要がある (この問題については定延 1995参照)。

6. まとめ

本稿では、X太郎とX次郎の複合語アクセント構造と、それに関連するいくつかの問題を考察した。これまでの議論をまとめると、次のような結論が得られる。まず第一に、X太郎・X次郎のアクセント構造の大半は従来の規則で説明できるものではないが、そこには非常に規則的な体系が存在している。その体系は、一般の複合名詞の場合とは異なり、複合語の前部が複合語全体のアクセント構造を決定するという特徴を示す。具体的には前部の長さによって三つの生産的なアクセント型が産出される。次に、X太郎・X次郎のアクセント構造を決めるのは、基本的には前部のモーラ長であるが、X次郎の場合とは異なり、X太郎の場合には音節長も不可欠な要素となる。つまりX次郎のアクセント型は前部のモーラ数によって決まり、X太郎のアクセント型は前部のモーラ数と音節数によって決まるのである。本稿では、このような音節の役割が決して例外的なものではないことを、他のアクセント現象を例に論じた。

第三に、X太郎とX次郎の間の違いは恣意的なものではなく、後部の語頭の清濁の違いと相関していると思われる。前部が1音節2モーラという構造において、X太郎のように後部が清音で始まる場合には無核の複合語 (たとえば「金太郎」) が生まれ、逆にX次郎のように濁音で始まる場合には前部にアクセント核をもつ有核語 (たとえば「金^{きん}次郎」) が作り出される。もっと

も、後部の清濁とアクセント型（無核・有核）の間にこのような相関関係が見られる理由は明確ではない。以前より清濁とアクセント構造との間には一定の因果関係が指摘されてきたが、この説明は「金太郎」―「金次郎」のペアに見られるような相関関係にはまったくあてはまらない。これまで指摘されてきた事例では、生理学的観点から「濁音がアクセント核の出現を阻止する」という説明が可能であったが、X太郎・X次郎の間に見られる清濁とアクセント構造との相関関係は、これとは全く逆の関係なのである。

本稿では最後に、X太郎・X次郎のアクセント規則に現れてくる「1、2、3以上」という三分法が完全に恣意的なものではないことも示した。これらアクセント規則に現れる三分法は、名詞の数の体系や、幼児による語彙獲得や数詞獲得（正確には数字の読み方の習得）など、複数の独立した言語現象に現れてくる原理である。

本稿ではこのようにX太郎とX次郎のアクセント構造の分析をもとに、その分析結果と、関連する興味深い事実をいくつか指摘したが、未解決の問題も少なくないことを強調しておきたい。その一つは、既に述べた清濁とアクセント構造の相関関係に関する問題である。二つ目の問題として、なぜ「太郎」や「次郎」という名詞（人名）が「バレー」や「作業」のような普通名詞とは異なる複合語アクセント型を示すのかという問題をあげることができる。両者のアクセント構造は無関係ではなく、X太郎・X次郎の場合でも前部が3モーラ以上の長さを持つ場合には、普通名詞と同じアクセント型（たとえば「力^{ちから}太郎」）が産出される。しかしX太郎・X次郎の場合には、前部が2モーラ以下の場合に、変則的なアクセント型が作り出される。通常の複合名詞の場合には、後部が同一であれば画一的な複合語アクセント構造が作り出されるのに対し、X太郎・X次郎の場合には前部の長さによって複数のアクセント型が産出されるのである。太郎や次郎などの人名が、なぜ一般名詞とは異なる振る舞いを示すのか、依然謎である。

もう一つの難解な問題は、X太郎・X次郎の場合に、前部の長さで複合語のアクセント型の間になぜ(7)や(10)のような相関が見られるのかという疑問である。たとえば、前部が1モーラであれば無核となり、あるいは2音節2モーラであれば「桃太郎」「桃次郎」というアクセント型が生じるが、これはなにゆえであろうか。つまり、前部の特定の長さが特定のアクセント構造を作り出す背後には、どのような原理が働いているのであろうか――あるいはまったく恣意的なものであろうか。既に述べたように、「1、2、3以上」という三分法は恣意的なものではなく、「X=3以上」の場合に一般的な（無標の）構造が出現する一方で、「X=1」、「X=2」の場合に例外的な（有標の）構造が出現することは、他の独立した現象にも観察されることである。このこと自体は特筆に値することと思われるが、その一方で、「X=1」、「X=2」という場合になぜ特定のアクセント型が生み出されるのか、今後に残された課題である。

注

*本稿は1996～1997年に音声文法研究会、関西音韻論研究会、及び九州大学言語学講演会で口頭発表したものに加筆修正したものである。これらの口頭発表にコメントを下された方々に感謝したい。本稿は、ATR自動音声翻訳通信研究所からの平成8年度受託研究費と松下国際財団及び大川情報通信基金からの研究助成による研究成果の一部を報告したものである。

1. 本稿では混乱を避けるために、語のアクセント構造と抽象的なレベルのアクセント核(´)の概念を区別し、前者を「アクセント型」または「アクセント構造」、後者を「アクセント核」または単に「核」と呼ぶ。また「モーラ」という用語は「拍」と同義の概念として用いる。

2. もっとも前部、後部とも2モーラ以下の場合は例外であり、複合語アクセント規則よりむしろ単純語のアクセント規則に従う(秋永 1981)。

3. (4)にあげた三つのアクセント型以外に、「浦島太郎(うらしま たろう)」のように、二要素が一つのアクセント単位に融合しない複合語が存在する。このように音韻的に一語化しない例は、本稿では考察の対象外とする(詳しくは窪田 1995a, 窪田・伊藤・メスター 1997を参照されたい)。

4. 本稿では無核の語は無印で表記する。

5. 本稿で報告している分析は、筆者が6名の東京方言話者(30歳代1名、40歳代3名、60歳代1名、70歳代1名)の発音を調査した結果である。

6. 二重母音の第二要素は、他のアクセント規則においては撥音や長音などのいわゆる特殊拍と同じ振る舞いを見せる。たとえば外来語アクセント規則や一般名詞の複合名詞アクセント規則ではアクセント核を担わないことが多い:(例)ラ[´]イター,*ライ[´]ター;ほっか[´]いどう,*ほっかい[´]どう(北海道)。(8b)において、同じ要素がなぜ他の特殊拍と異なる振る舞いを示すか(つまり自立性を持っているのか)、その理由は不明であるが、一つの可能性として語種の違いが考えられる。つまり「X太郎」に関与する二重母音性の母音連続は和語であり、上記の外来語アクセント規則や複合語アクセント規則に関与するのは漢語・外来語である。

7. 話者によっては「垢太郎」などの一部の語を(8d)と同じアクセント型(垢太[´]郎)で発音する場合も観察される。しかしこれらの話者でも一般的には(8c)の語を伝統的な桃太郎のアクセント型(桃[´]太郎)で発音する場合が優勢である。

8. 音節という単位は外来語アクセント規則の記述にも不可欠なものである(窪田 1996a)。

9. 「金五郎」に対する無核の発音は落語家「柳家金五楼」の「金五楼」が無核で発音されることと無関係ではないというのが東京方言話者に共通した直観のようである。この直観を前提に考えると、(15b)に許容される無核の発音は、なじみ度・慣用度による無核化と関連づけることができるかもしれない(秋永 1981参照)。

10. この事実は野口武彦氏の指摘による。

11. (15b)のバリエーションをこのように解釈すると、X五郎タイプの一部の語で有核から無核へと変化が起こっていることになる。これをモーラと音節の観点から見ると、X五郎のアクセント規則がモーラを主体としたX次郎式の規則から、音節をも必要とするX太郎式の規則へと変化していることを意味している。この変化の流れは、東京方言のアクセント体系一般にモーラ主体の体系から音節をも取り込んだ体系に変化しているという独立した事実(川上 1995)とも一致するものである。これは、東京方言の——あるいは日本語全体の——アクセント体系の変化の方向性を考える上で、重要な示唆を含んでいると言えよう。

12. X^{じゅうろう}十郎という複合語はこれらのいずれとも異なり、前部が2モーラ以下であれば全体が無核となり(例:喜^き十郎、金^{きん}十郎、長^{ちやう}十郎、正^{せい}十郎、正^{まさ}十郎、金^{かね}十郎)、3モーラ以上であれば後部の初頭にアクセントをとる有核タイプとなる(例:力^{ちから}十郎、ウルトラマン十[´]郎)。X十郎がなぜこのような規則性を示すかはわからないが、十郎という名詞は本稿で考察している他の名詞とはモーラ長やアクセント構造が異なることから、X太郎などと単純に比較することはできない。

13. これは福田泰子氏の指摘による。

14. もちろんこれらの二つの尺度が常に一致するわけではない。ナ行音、ワ行音などは清音であるが有声音である。
15. もっともこの相関関係は絶対的なものではなく、「やま」ざき（山崎）」のような例も少なからず存在する。
16. 現代英語の複数は「2以上」ではない。'one and a half hours'などの表現からもわかるように、1を超える場合は複数として扱われている（坪井 1996）。
17. 金水敏氏の指摘による。
18. 「3」を表す序数詞*third*は基数詞*three*から母音と子音の音位転換(*metathesis*)によって生じたものである（本来の語形は*thrid*）。基数詞からの派生語であるという点において*four-fourth*, *five-fifth*をはじめとする序数詞と共通している。
19. *once*, *twice*という語彙はそれぞれ*one*, *two*という基数詞と語源的に無関係ではないが、ここで問題にしているのは「X回」という反復数詞が独立した語彙を与えられているか、それとも「X+回」という分析的な複合表現として表されるかという違いである。その意味において、英語ではXの値が1及び2の場合には、特殊な表現を与えられ、3以上の場合には規則的な分析的表現が与えられている。
20. 田中伸一氏の示唆による。
21. 複合名詞アクセントが含意する分割法については窪蘭・伊藤・メスター(1997)を参照されたい。

参考文献

- 秋永一枝 (1981) 「東京アクセントの習得法則」『明解日本語アクセント辞典』巻末、東京：三省堂。
- 荒木一雄・安井稔編 (1992) 『現代英文法辞典』東京：三省堂。
- 上野善道 (1997) 「複合語のアクセント」、国広哲弥他編『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』（杉藤美代子監修『日本語音声』第2巻）、東京：三省堂。
- 川上 薬 (1995) 『日本語アクセント論集』汲古書房。
- 窪蘭晴夫 (1994) 「日本語の音節量について」、『国語学』178, 7-17。
- 窪蘭晴夫 (1995a) 『語形成と音韻構造』、くろしお出版。
- Kubozono, H. (1995b) Constraint interaction in Japanese phonology: Evidence from compound accent. *Phonology at Santa Cruz (PASC)* 4, 21-38, University of California at Santa Cruz.
- Kubozono, H. (1996a) Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation. 『音声学会会報』211号, 71-82, 日本音声学会。
- Kubozono, Haruo (1997) Lexical markedness and variation: A nonderivational account of Japanese compound accent. *WCCFL* 15, 273-287.
- 窪蘭晴夫 (1998) 「モーラと音節の普遍性」『音声研究』第2巻第1号、日本音声学会。
- Kubozono, H. (forthcoming) Mora and syllable. To appear in N. Tsujimura (ed.). *The Handbook of Japanese Linguistics*. Oxford: Blackwell.
- 窪蘭晴夫・伊藤順子・A. メスター (1997) 「音韻構造から見た語と句の境界」、音声文法研究会編『文法と音声』、東京：くろしお出版。
- 窪蘭晴夫・太田 聡 (1998) 『音韻構造とアクセント』東京：研究社。
- 松浪有・池上嘉彦・今井邦彦編 (1983) 『英語学事典』大修館。

- McCawley, J.D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- McCawley, J.D. (1978) What is a tone language? In Fromkin, V. (ed.) *Tone: A Linguistic Survey*. New York: Academic Press. 113-131.
- Pinker, S. (1994) *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. New York: William Morrow Company. (棕田直子訳『言語を生み出す本能』日本放送出版協会)。
- 定延利之 (1995) 「魔法の数・3」の構想」『近代』78, 1-32. 神戸大学.
- 佐藤大和 (1989) 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『日本語の音声・音韻(上)』(講座日本語と日本語教育2)、明治書院。
- 杉藤美代子 (1965) 「柴田さんと今田さん——単語の聴覚的弁別についての一考察」『言語生活』165号。
- 坪井栄治郎 (1996) 「短複の言語学」『言語』25-5, 68-71。